

平成 28 年度都立看護専門学校推薦入学試験小論文課題

次の文章は、「^{すいこう}推敲」という見出しで書かれたものの一部です。これを読んで、設問に答えなさい。

この言葉は唐の^{かとう}賈島という詩人の故事からできた言葉です。彼が詩の言葉に迷ってぼんやりしていて、偉い役人でもあった^{かんゆ}韓愈という詩人の行列にうっかりぶち当たってしまったのです。無礼者め、となるところですが、賈島は「僧は^お推す月下の門」とするか「僧は^{たた}敲く月下の門」とするのかで迷っていたと言ひ、意見を聞きました。韓愈は「敲く」がいいとアドバイスしたそうです。この故事から、文章を直すことを「推敲」と言います。内容的に考えて、確かに「月の下で、僧が門をたたく」という方が^{聴覚}聴覚の表現もあっていいようにも思います。

このように本来の「推敲」とは、単なる書き間違いを直すものではなく、どの表現がいいかを考えることです。この場合は漢詩ですから、内容だけではなく、音の並びのことや言葉の伝統的な使い方に合うかどうかなど、様々なことを考えなければならなかったはずで、単に不注意を直すだけではないのです。

もう一つ、この故事は、書いたものを読んでもらったり、書きたいことについて意見を聞くことで、よりよい文章になるということも表しています。どちらの表現がよいのか、自分はその文章をどう読むのか、といったことをお互いに交流することで、「書く」立場だけでなく、「読まれる」立場になります。これはとても大切なことです。また、折に触れて、相手の文章を「読む」立場になれば、違った視点から考えることができます。こうして自分なりの表現を工夫し、書くことに対する反省的なものを見方ができるようになっていけば、表現はさらに豊かに深まっていきます。

書いたらそれで終わり、ということではなくて、ぜひ見直しをしましょう。そして、できればほかの人にも読んでもらいましょう。自分一人で書く場合でも、書いたあと、一度時間をおいてから読み直すと、意外な場所がわかりにくいことに気づいたり、もっとよい表現を思いついたりすることがあるものです。足りないところに思い当たることもよくあります。

出典：森山卓郎著「日本語の〈書き〉方」 岩波ジュニア新書 2013年

(設問)

この文章の内容を要約した上で、「推敲」について、あなたの考えを 800 字程度で述べなさい。